【 巻 頭 言 】

半世紀の節目の年を迎えて

日本熱測定学会会長　近畿大学　木村 隆良

日本熱測定学会の会員の皆様，平成 26 年の新年を迎えおめでとうございます。皆様にとって今年もよき年であることをお祈り申し上げます。

さて昨年 10 月から猿山靖夫前会長の後を受けて 2 年間の任期で本会会長に就任いたしました。多くの皆様から推挙頂き，図らずもこのたび続貂の栄にあずかりました。今日まで育てて頂いた本会のため，微力ながらお役に立つならばとの思いで務めさせて頂くことにいたしました。

先日学生さんといつものように夜中に実験のことを話していてふと本棚に目が流れ，本誌－熱測定の 1 巻と 2 巻を合本製本したものに届きました。今年は熱測定討論会が 1965 年に大阪大学松下会館で開催されてから 50 年の節目に当たり，設立当時の先達の先生方が何を考えておられたのかと温故知新の思いで開いてみました。1 巻（1, 2 号合本）には関集三先生が，1 巻 3 号には藤代亮一先生が巻頭言を書かれており，熱測定討論会開催から熱測定学会設立，10 周年記念熱測定討論会において神田英蔵先生，斉藤平吉先生，宗宮尚行先生，田宮博先生など優れた先駆者の先生方の業績をたたえておられます。小生は全共連ビルで開催された 10 周年記念熱測定討論会に参加し，『日本における熱測定の曙』を拝聴させていただいた時，今も鮮明に記憶に残っているのは田宮博先生が廣部一先生と同様な温度計を使い，真菌の成長サーモグラムの精密測定された結果を拝見し，装置の工夫と努力でその当時の使っていた熱量計と同様のきれいな実験データを示されたことが強く脳裏に残っております。その衝撃が強く，今もなおあきらめずに装置を少しずつではありますが触り続けております。

本誌30号（5）224-250（2003）には「研究分野でみる日本熱測定学会」と題し，日本の熱測定のそれぞれの分野の特筆すべき足跡がまとめられております。それからの10年の間にはデジタル化の大きな進歩といわゆるハイパー測定の大きな進歩があり，熱測定は溶液中の分子間相互作用，物質の純度，高分子材料評価，弾性率の温度依存性，医薬品の安定性，結晶化速度，有機物の分解過程，グリーン・マテリアルの特性解析，建材適合性，タンパク質などを含む生態関連物質，細胞増殖，バイオアベイラビリティ，土壌解析，環境解析など，基礎から応用まで，単純な物質から複雑系である生体などの分野までの研究に広く利用されております。

本会先達の実績を振返ると，国内ばかりでなく世界に大きな activity で貢献し，発展に寄与されてこられました。特筆することは熱量測定と熱分析が見事に融合している世界でも類を見ない学会であります。その成果の一部は第 5 回 ICTA から始まって，ICCT96, ICCT2010, ICTAC15 などの本学会が開催した国際会議はそれぞれが大成功をおさめ，国内外に本学会の実力を示したことであると存じます。またアジア地域のリーダとして 1986 年から日中および国際熱測定シンポジムをすでに 8 回開催し，ESTAC, MEDICTA, CEEC-TAC などヨーロッパ中心の熱測定国際学会に対してアジアの国際熱測定学会として大きな成果は誇りうるものと存じます。

また研究成果は研究者が占有すべきものではなく社会に還元すべく，専門の先生方の協力を得て，既に 71 回の熱測定講習会，8 回の熱分析基礎講座を開催し，熱測定を始められた方に適正な測定法や解析法を基礎から実習を含めて，その普及に努めております。

熱測定討論会 50 回目の節目に当たって，これら先陣の偉大な成果の上に，関集三先生や藤代亮一先生が書かれておりますように，すべての会員の方々から学会運営や行事に関して積極的なご意見をいただき，学会のさらなる一歩の発展に寄与させていただきたいと存じます。

また非常に残念ですが，本学会の創始者のおひとりである関集三先生が昨年 12 月 24 日，第 50 回記念熱測定討論会を直前に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。